

17世紀の医学学習指南書

—Kestner『医学書誌』記載書籍の分析—

澤井 直

順天堂大学医学部医史学研究室

Christoph Wilhelm Kestnerの主題別医学書誌目録『医学書誌』(Bibliotheca medica, 1746)は医学学習者のための「医学学習指南書」を一つの書籍ジャンルとして扱い、「医学方法書」(De methodographis medicis)という章にまとめて記載している。「癒しの術を確実に習得するための方法と理論について記している著作の数は少なくない」とし、古代のヒポクラテスとガレノスの著作に含まれる、学習者の態度や医師のあるべき姿などを説いた著作から始め、16世紀以降に発表された40弱の著作・記録を時代順に記載している。

Kestnerは21冊の著作を17世紀の医学方法書として挙げている。

Johann Georg Schenck (1607), Johannes Stephanus Strobelberger (1620), Peter Lauremberg (1621), Samuel Hafenreffer (1622), Johan Rode (1625), Caspar Bartholin (1628), Petrus Castellus (1637), van der Linden (1639), Daniel Sennert (1642), Albertus Kyper (1643), Charles Drelincourt (1654), Jacob Pancraz Bruno (1661), Thomas Bartholin (1673), Georg Franck von Franckenau (1674), Thomas Bartholin (1674), Hermann Conring (1686), Günther Christoph Schelhammer (1687), Samuel Gotthelf Manitius (1693), Barthold Krüger (1697), Franz Heinrich Werckmeister (1698)

Schenck (1607)は16世紀の5人の医学者による発表を合冊し、序文を加えたものである。同様にSchelhammer (1687)はJohan Rode (1625), Bartholin (1628), Castellus (1637), Linden (1639), Conring (1686)の合冊である。このような合冊本の存在は、学習方法を扱う書籍が一つのジャンルとして扱われていたことを示している。

17世紀の医学方法書は、Kyper (1643)のような大部の場合には医師の心得、求められる資質、ノートのとおり方など、医師を目指す者に対する様々な教を記しているが、多くの場合は学習すべき事項の説明が中心になっている。学習すべき事項の記載は16世紀のものとは比べて比較的近い時代の医学者や哲学者が中心である。17世紀前半では特に、自然学、解剖学、植物学に関してはゼンネルト、ヴェサリウス、マッティオリなど16世紀以降の著作家への言及が多いが、病気の理論や治療理論に関する言及はガレノスとヒポクラテスが中心で、一部で16世紀のカスパル・ホフマンの名が挙げられる。17世紀後半の医学方法書はすべての事項で17世紀以降の著作家への言及が中心となり、ハーヴィの血液循環やデカルト以降の機械論的生理学も早々に取り入れられている。

16世紀の医学方法書になかった要素として、医学学習のための旅行に関する記述が含まれるようになった。Sennert (1642)は若者が医師として活動し始める前に外国で見聞を深めるように説き、Bartholin (1674)も自分の息子宛に、古代以来の医師の例を引いて同じように医学学習のための旅行を勧めている。また旅行の際に気をつけるべきことも記されている。

『医学書誌』記載の17世紀の「医学学習指南書」に関し、全体としての特徴を把握することができた。また、個々の書籍を扱う際にも「医学学習指南書」が継続的に発表され続けた書籍ジャンルに含まれるものとして考える必要があることが明らかになった。

〈本研究はJSPS科研費18K00265の助成を受けたものです。〉